

新年のごあいさつ

日本オペレーションズ・リサーチ学会会長
中央大学 教授

今野 浩



OR 学会員の皆さんは、新年をどのようにお過ごしでしょうか。

会長就任の挨拶文を書いたのは、ついこの間のこのように思われますが、実際にはもう半年以上の時間が過ぎてしまいました。編集長の御厚意で、このところ毎月本誌に「OR 40 年」を連載していますので、露出過剰ではないかと申し上げましたところ、あれはボランティア、これはマンドトリーとの由です。

そこで、いま私が考えていることのいくつかを簡条書きで記すことにします。

1. 私はこれまで、OR 学会を含めて六つの学会の役員を経験いたしました。会長になってみて、改めて OR 学会は誠に素晴らしい学会だと思えるようになりました。会員諸氏は OR の研究・普及・教育に邁進する一方、役員諸氏と事務局の皆様は、様々な仕事を効率的にさばっています。誰もが、「希少なリソースの最適配分」の原則を身をもって体現されているのです。
2. 学会役員の中で最も大変な仕事を担当しているのが、理事会の要として様々な案件を処理する庶務理事と、本誌の編集理事です。ローテーションであるにも拘わらず、このような難しい仕事を巧みにこなしてゆくスーパー・エフィシエントな人が次々と登場する OR 学会は、人材の宝庫というべきでしょう。

若い頃の私は、これらの仕事が降ってく

るのを恐れていました。研究普及理事、論文誌編集理事を即決で引き受けたのは、この仕事から逃れたかったために外なりません。そんなわけで、歴代編集長とそれをサポートする編集委員諸氏の dedication を見てきた私は、いつも後ろめたい気持ちを抱いていました。今回連載を申し出たのは、編集委員の負担を多少なりとも軽減したいと考えたためです。皆様も、編集委員会に面白い記事売り込んで下さるようお願い致します（もちろん面白くなければボツですが）。

3. 残念なことに、これらの人々の努力にも拘わらず、会員の中には OR 学会のあり方に対する根強い批判があります。その中で突出しているのが、“役に立たない研究が多すぎる。そのため、企業における OR のプレゼンスが低下している”という、実務家サイドの批判です（日本だけでなく、米国でもしばしばこのような批判を耳にします）。

しかし、すべての人がすぐに役に立つ研究ばかりやっているような学会の将来は危いのではないのでしょうか。今すぐには役に立たないかもしれないけれど、将来必ず役に立つ（はずの）研究をやっている人がたくさん居るということを分かって欲しいのです。なお、この件については、後に連載「整数計画法の大逆転」の中で述べたいと思います。

4. とはいうものの、理論研究者は上記の批判に対して、より謙虚に耳を傾ける必要があります。最低限、実務家や応用研究者の努力にもう少し敬意を払うことが必要ではないでしょうか。そして一定の年齢を超えたら、積極的に応用研究に参入して欲しいものです。応用研究には、理論研究とは違った面白さがありますし、年の功を生かすこともできるからです。なお、この件については、「応転のススメ」の中で詳しく書くつもりです。

5. この10年の間に、OR学会の賛助会員は大幅に減少しました。1994年には約200社あったものが、今では約90社と文字どおり半減し、これによって学会の財政状態は大幅に悪化しました。

会員の中には、企業におけるORのプレゼンスが弱まった結果だと主張する人がいます。確かにそれもあるでしょう。しかし賛助会員の減少に悩んでいるのは、OR学会だけではありません。多くの企業はバブル崩壊によって大きなダメージを受け、学会との「お付き合い」としての賛助会費をカットしました。

企業である以上、それはやむをえないことです。しかし私は、会員減少は既に底を打ったと考えています。景気回復の中で、少し状況が変わり始めています。私はこれから先、これまで長く協力して頂いた企業に対するサービスを強化するとともに、賛助会員を退会された企業にも「最適化の時代」の到来をアピールすることによって、復帰をお願いしたいと考えています。また、IT関係をはじめとする企業の中には、本学会との接点がある企業も少なくありません。これらの企業に積極的にアプローチすることによって、会員数を増やすべく努力した

と思いますので、お知り合いの企業を御紹介下さるようお願い致します。

6. その一方で、私は賛助会員の勧誘には限界があると考えています。しかし、学会活動の原点は企業ではなく個人です。最も重要なことは、個人会員、それも若い会員を増やすことではないでしょうか。その意味で、学生会員の増加は未来への希望を膨らませます。大学関係者は、なるべく多くの学生諸君を本学会に勧誘して頂きたいものです。

またシニア会員に対してお願いしたいことは、研究活動からリタイアしても、引き続き学会に御協力頂きたいということです。可能な限り学会に止まって、若い人に対してメッセージを送り続けて欲しいのです。

7. ここで一つ提案です。それは個人賛助会員制度の設立です。OR学会を支援したいと考える個人会員に、一般会費とは別に賛助会費を拠出して頂く制度です。

OR学会の会費のほとんどは、会員に還元されています。足りない分を企業の賛助会費やセミナー収入などで補ってきたわけですが、企業からの協力に多くを望めない状況の下で、経済的に余裕のある会員に、企業に代わって賛助会費を拠出して頂くという制度です。お金は天下のまわり物です。生きている間には使い切れそうもないお金の一部を学会に御寄付頂き、景気回復と学会発展にお役立て頂けないでしょうか。

8. OR学会は、2007年に創立50周年を迎えます。INFORMSは50周年を記念して、2002年に33人のスターたちのエッセイを掲載した、オペレーションズ・リサーチ誌の特集号を出しました。その充実した内容は、50周年を祝うに相応しいものでした。わがOR学会も、あまりお金を使わずに、意義深い50周年事業を実施したいものです。